

2018年7月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 無智と苦悩

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫／存在の法則（縁起）に関する經典群／因縁相応／

#### 1 法説、2 分別

庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社

#### (2) 主題

十二支縁起を通して、無明（無智）が苦悩の原因となることを学んでみたいと思います。

### 2. 流転縁起

#### (1) 経文「法説」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、「比丘たちよ」と呼ばせたまい、彼らもろもろの比丘は、「大徳よ」と答えた。そこで、世尊は、仰せられた。

「比丘たちよ、わたしはいま汝らに縁起について説こうと思う。汝らはそれをよく聞いて、考えてみるがよろしい。では説こう」

「大徳よ、かしこまりました」

と、彼らもろもろの比丘は答えた。そこで世尊は説いていった。

「比丘たちよ、縁起とは何であろうか。比丘たちよ、

無明(むみょう)によって行(ぎょう)がある。

行によって識(しき)がある。

識によって名色(みょうしき)がある。

名色によって六処(ろくしょ)がある。

六処によって触(そく)がある。

触によって受(じゅ)がある。

受によって愛(あい)がある。

愛によって取(しゅ)がある。

取によって有(う)がある。

有によって生(しょう)がある。

生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。

かかるものが、すべての苦の集積のよって起るところである。比丘たちよ、これを縁によって起るとはいうのである」（増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.127~128）

## (2) 流転縁起

ここに、十二支の流転縁起が語られています。

「すべての苦の集積」すなわち「我が身に生じるあらゆる苦」は、「無明」が根本原因となって起こると説かれています。

## (3) 無明の原因を追求しない

経文は、「何があるから無明があるのか」という問いを発していません。「無明の原因は無明」となるために、これ以上の追求はしないのであるとされています。

## 3. 還滅縁起

### (1) 経文「法説」

「比丘たちよ、また、

無明を余すところなく離れ滅することによって行は滅する。

行を滅することによって識は滅する。

識を滅することによって名色は滅する。

名色を滅することによって六処は滅する。

六処を滅することによって触は滅する。

触の滅することによって受は滅する。

受の滅することによって愛は滅する。

愛の滅することによって取が滅する。

取の滅することによって有が滅する。

有の滅することによって生が滅する。

生の滅することによって老死・愁・悲・苦・憂・悩が滅する。

かかるものが、すべての苦の集積のよって滅するところである」

世尊は、そのように説きたもうた。彼らもろもろの比丘たちは、世尊の説かせたもうところを聞いて、みな歓喜して受納した。（増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.128）

### (2) 還滅縁起

ここには十二支の還滅縁起が語られています。

無明を滅すれば、行、識、……と順次滅して、老死・愁・悲・苦・憂・悩が滅します。こうして、「我が身に生じるあらゆる苦」が、滅するのです。

苦の根本原因である無明を滅してしまえば苦は生じなくなり、十二支縁起は言っているわけです。

## (3) 無明の滅

「無明を滅する」とは、「無智ではなくなる」ということです。

「智」を得れば「無智（無明）」ではなくなります。

ですから「無明を滅しよう」と思うのではなく、「智を得よう」と思えばいいのです。

## (4) 教えを受納する

「彼らもろもろの比丘たちは、世尊の説かせたもうところを聞いて、みな歓喜して受納した」とあります。釈迦牟尼世尊の教えを理解し、納得し、感動して、しっかり受け止めたということでありましょう。

## 4. 無明

## (1) 経文「分別」

「比丘たちよ、では、無明（無智）とはなんであろうか。比丘たちよ、苦についての無智、苦の生起についての無智、苦の滅尽についての無智、および苦の滅尽にいたる道についての無智である。比丘たちよ、これを無明というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.132）

## (2) 縁起支の内容

経文「分別」に縁起支の説明がなされています。この学習会で、既に学んだものがあります。五支縁起の学習の折に、「愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・惱」について学びました。十支縁起の学習の折に、「識、名色、六処、触、受」について学びました。今回は、「無明、行」について学びたいと思います。

## (3) 無明

「無明」とは、「智慧を欠いている状態」です。これを「無智」とも言います。

経文「分別」では、次の「四つの無智」を「無明」と言っています。

苦についての無智

苦の生起についての無智

苦の滅尽についての無智

苦の滅尽にいたる道についての無智

## (4) 「無智」

「無明」とは「無智」であり、「無智」とは、「四つの聖諦」を知らないこと、または、知っていても実践できないことです。

「四つの聖諦にたいする無智」の中心は、「苦の原因である渴愛に対する無智」です。

渴愛にたいして無智（無明）である間は、苦悩を根本的に解決する道を開くことはできないことが、ここに述べられていると思います。

## 5. 行

### (1) 経文「分別」

「比丘たちよ、では、行（意志のうごき）とはなんであろうか。比丘たちよ、それには三つの行がある。すなわち、身における行と、口における行と、心における行とがそれである。比丘たちよ、これを行というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.132）

### (2) 行

「行」とは「意志のうごき」であるとあります。「意志のうごき」は、行動を生み出します。身における行（意志のうごき）が、身の振る舞いを生み出します。口における行（意志のうごき）が、言葉の振る舞いを生み出します。心における行（意志のうごき）が、心の振る舞いを生み出します。

### (3) 無明によって行がある

十二支縁起には、「無明によって行がある」とあります。

「無明」とは、四つの聖諦を知らず、実践できない状態です。したがって、渴愛（執着）を減らすことができません。このため「行（意志のうごき）」も執着に汚染され、身の振る舞い、言葉の振る舞い、心の振る舞いも、執着に汚染されます。

### (4) 行によって識がある

十二支縁起に、「行によって識がある」とあります。

執着に汚染された「行（意志のうごき）」によって生じる「識」は、やはり執着に汚染されています。「執着に汚染された識」から、「執着に汚染された人間性」が育まれることは、十支縁起で学びました。

## 6. 無智と苦悩

### (1) 執着が無明を生む

執着がありますと、執着の対象に心を奪われ、執着の対象を中心にものごとを考えたり、行ったりするようになります。

このため、理を見つめることもできず、ものごとのありのままを観ることもできず、ものごとを理で考えたり、行ったりすることもできなくなります。智慧が働かなくなり「無明」となるのです。

### (2) 無明（無智）

執着によって、理のひとつである四つの聖諦を理解することも難しくなりますし、知識として理解したとしても、実践することができません。

こうした、四つの聖諦に対する無智について、少し考えてみたいと思います。

## (3) 苦についての無智

「苦についての無智」とは、現実的な意味では、「自分が苦悩していることについての無智」です。このため、つぎのようなことになってしまいます。

自分が苦悩していることに気づかない。

自分が苦悩しているという事実を受け入れない。

自分が何を、どのように苦悩しているのかが分からない。

このような状態では、苦悩を解決する道は塞がってしまいます。

## (4) 苦の生起についての無智

「苦の生起についての無智」とは、「苦しみの原因は渴愛であることについての無智」です。このため、つぎのようなことになってしまいます。 自分の苦しみの原因を他人に求める

自分の苦しみの原因が自分にあると分かっても認めようとしない。

自分の苦しみの原因に触れまいとする。

この状態では、先に進むことができません。

## (5) 苦の滅尽についての無智

「苦の滅尽」とありますが、これは「苦の原因の滅尽」です。苦の原因を滅尽すれば、苦は滅尽するのです。「苦の滅尽についての無智」とは、「苦の原因である渴愛を滅すれば苦が滅することについての無智」です。このため、つぎのようなことになってしまいます。

渴愛の人生しか知らない人は、渴愛が苦悩を生むことが理解できません。

渴愛で生きてきた人は、渴愛を捨てると自分が居なくなるような気がします。

渴愛があってこそ人間というような観念を持っている人もいます。

こうして、渴愛を後生大事にしている間は、苦悩が滅する道は開けてきません。

## (6) 苦の滅尽にいたる道についての無智

「苦の滅尽にいたる道」は、「聖なる八支の道」です。「八正道」です。

「苦の滅尽にいたる道についての無智」とは、「八正道を知らない」または「八正道を知っているけれども実践しない」ことです。このため、つぎのようなことになってしまいます。

「八正道」に目を向けようとしない。

「八正道」なんか、自分にはとても実践できないと投げってしまう。

「八正道」のレベルを勝手に下げて、自分は八正道を実践していると自己満足している。

「四つの聖諦」や「八正道」の知識があることを「悟り」と錯覚して自己満足している。

こうして、現実の場で八正道を実践しないであれば、苦悩が解決することはありません。